

浄土

七月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿七日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授受郵便誌）第三五二号
昭和四十二年六月二十五日 印刷 昭和四十二年七月一日 発行

第三十三卷
第七号

華雲

華雲

華雲

大野法道

(大本山光明寺法主)

晨朝礼讃にある「悦目妙華雲」からとった語であるが、まことにすがすがしい光景である。

日本的にいえば、桜の花が一杯さき、この光景をみる誰の目も楽しませずにはおかない。

私のもっともすきな語の一つである。

— 目 次 —

表紙「蓮」松壽達文画

校門に立つ人影	竹中信常…(2)
おぼんと現代	古賀昌光…(5)
今日に於ける婦人の心の持ち方	川内知光…(8)
名士訪問 大野法道大僧正	(12)
御歌をいただく	(15)
新興教団探訪⑥ 妙智会	藤井正雄…(12)
お茶をおいしく お茶を利用した楽しい料理法	三浦純亭(20)
読者の声 貧と富	(23)
歴史夜話 ナイロン・ママ	玉山成元…(24)
浄土宗の教え⑥ 三縁について	柴田哲彦…(26)
連 続 話 みんなの法然さま・勝尾寺から吉水へ	高橋良和…(29)

むまれてはまづおもひ出んふるさとに
ちぎりしもののふかきまことを

法然上人御歌





常 信 中 竹

一

「女性仏教」という雑誌の六月号に「近世百年を指導した仏教人」という特集があった。その中に、思想界の代表へのアンケートがおこなわれ五十人ほどの人の回答がのっていた。その第一問は明治百年にちなんで、その間に出た偉僧・傑僧を三人あげよというのである。そしてその集計が一覧表になっていたが。第一位は渡辺海旭で九票であった。五十人で九票だから約五分の一の得票である。

仏教者に人気投票のような批評はさしひかえなければならぬが、渡辺海旭師は人も知る如く浄土宗の僧侶であると同時に、名門芝中学を今日あらしめた名校長であり、さらには世界的な仏教学者であって、とても筆者などの筆で描きつくせるような人物ではない。現在でも、われこそは渡辺門下の一人であると豪語する有名無名の有象無象が大勢いて、地下の渡辺先生を苦笑させているのである。

二

わたしの住む寺は目黒にある。芝中へかようには当時の市電、いまの都電で赤羽橋でおりて、芝公園を横切つてゆく。その頃の芝中は海軍スタイルで白いゲートルを巻いていなければならなかった。そして、それが真白でなければならなかった。規律は厳格であった。軍隊手帳のような通信簿は常に胸のポケットに入れておかねばならなかった。そして、遅刻は精神がタルンでいる証拠であるから欠席より悪いとされ、遅刻して校門を入るときは、門衛（これが海軍下士官あがりのこわいオヂサンであった）に通信簿をとり上げられてしまう。そして、放課後、おそるおそる教員室にいつて、受持ちの先生から、文句をいわれながらかえしてもらうのである。だから、当時の芝中生にとって、遅刻がなによりもこわかった。わたしは、五十



影人立つ門校

—明治百年の偉人渡辺海旭先生—

歳を越した今日でも、まだ、ときどき、遅刻して門衛に手帳をとりあげられる夢をみることもある。赤羽橋をおりて、今日はあぶないなと思ひながら、いまの東京タワーのあたりまでくると、始業を告げる集合ラッパ（学校の時間を告げる合図はすべて軍隊のラッパでおこなわれた）が、木々の梢を越してひびいてくるのである。そうすると、三々五々歩いてきた白ゲートルの芝中生は、一せいに、それラッパになったとばかり、かけ出すのである。上級生はコンパスが大きいからほとんどいってしうが、チビで下級生のわたしは、大きな鞆をぶらさげて、フウフウいってついていったものだ。

御承知のように、芝公園は坂が多い。いくつかの坂を一生懸命にかけあがって、校門がみえるところまでくると、最後にもっとも急な坂があって、トテモではないがへたばってしまいたくなる。

そのときである。校門のところに人影がみえる。その人は校章を飾った講堂を背にして、門の中央に大きく立って、かけ寄ってくる生徒達の方へ、右手をあげて手まねいてくれているのである。その姿をみると生徒たちはよみがえったような元気が出て、一気に、校門にとびこむのである。一歩でも門の中へ入ればしめたものである。通信簿をとりあげられずにすむ。そして、門に立つ人に、拳手の礼（これも軍隊式で、生徒はすべてあいさつは敬礼でした）をしてそこをとおるのである。

手をあげて、手まねいてくれた人、生徒たちがそれをみてよみがえったように生々となる人、そして、朝、校門に立つことを一日として欠かしたことのなかった人、この人が校長渡辺海旭先生だったのである。わたしは、今日になっても、校門に立って、遅刻のセトギワの生徒をやさしくまねいておられた渡辺先生の姿を思い

出すと、二河白道の西岸に立つて、火と水の河に足をすくませて立つ衆生を「おそれることなく、わたりきたれ」とはげましてくださるアミダ如来の姿がダブついてきて眼頭がジンと熱くなるのである。

規律はあくまでも厳格であった。しかし、その厳格さの裏には優しく抱きとってくれる無限の愛が輝いていた。それだからこそ厳格な規律が守られたのであろう。

校門に渡辺先生の姿が消え、鉄の戸が無情に閉じられているのを見て、そのまましおしおと引かえしたことも何回もあった。遅刻は欠席より悪い、という鉄則のために。

三

土曜日、当番などでおくられて赤羽から都電にのって、ふと前をみると渡辺先生が立っている。あわてて席を立とうとすると「いいス いいス」

手をふって、そのまま立っておられる。一年坊主と校長先生とは話しするなものもなく、そのまま無言の行で目黒までゆく。先生は陸橋をわたって権之助坂をおりていかれる。土曜に限って、電車の中で校長と会うことの理由についてはその後長い間わからなかった。中学を出、大学に入り、渡辺先生も他界されたのち、ある機会にそれがわかった。目黒の長泉院というお寺に、土曜日の午後になるとよくいかれたのである。やはり浄土宗の碩学大島泰信先生の夫人となられた先生の妹さんのところへいかれたのである。それは、魚妻主義でとおされた渡辺先生が書生相手の味気ない日常生活をうるおす週に一度の家庭的な時間だったのである。みずからを律するに峻厳をきわめた先生の心奥に、測々とわきいである慈愛の泉の源はこんなところにかくされていたのであった。渡辺先生がのこされた偉大な事業は大正新修大蔵經の発刊をはじめとして無数にあるが、その一つとして、またそのゆえに多くの人の胸中に先生の偉大さを刻みつけたのは「社会事業」の仕事であった。仏教者としてだけでなく、むしろそういった既成の枠をこえた、一人の人間としての渡辺海旭がいかに人を愛し、人を憐れみ、仏陀の心をもって世に尽したかをアリアリと物がたる事実であった。そして、そのように、一人の人間として、人間を愛したこと、このことが、渡辺海旭を一浄土宗僧侶、一仏教学者、一中学校長、一社会事業家、そういった個々の、カラにはまつた規格をこえて、大きく、日本近代百年の偉人として、衆意の帰一するところとなったのであろう。

おぼんと現代

古賀昌光



人間は、亡くなってしまったが最後、もうそれきりで、すべておしまいだというのは、まことに悲しいことであり、さみしいきわみであります。

ある時代には、わたしたちとおなじように、生活をいとなみ、家族となごみながら、精一杯はたらき生きつづけた人が、亡くなるとともに、紙屑のようにわすれさられ、遠くへ押しやってしまうことは、人間の情として偲びがたいことでもあります。

姿かたちこそ見えませんが、声こそ聞えませんが、

真心こめてお迎えすれば、供養に応じてきてくださる、「亡き人」の存在を信じなければいけないところを、じつは、おたがいに生きている人間は、誰れでもがもっているのです。

亡き人のいますが如き魂まつり

平生は仕事や生活におわれて、こうした純真なころには、なりがたいものでありますが、いまお盆を迎えて、お灯あかりをあげ、香のけむりゆらぐお仏壇に手をあわせて、こころしずかに故人をしのんでみると、このことがしみじみと感じられるのであります。

お盆は盂蘭盆すなわち「さかさにつるされた苦しみ」という意味でそれより救われるのであります。

それは孟蘭盆經に由来しており、有名な目連尊者の母をおもう孝養の因縁故事により、行なわれている行事であります。

これはインド古来の農耕社会におこなわれた祖霊崇拜と、仏教の報恩思想がむすびついたものであるともいわれていますが、そのことより、親が子をなつかしみ、子が親を慕う人間の情愛の自然の発露が、こうした民俗の行事のなかに、しみいつていることに気づくのであります。

二

現代の社会生活をふりかえってみますと、科学文明、物質文明がわたしたちの生活をおおい、機械化され合理化し、スビード化して生活を便利にしています。

しかし、反面、交通事故などをみても、子供の目のまえて母が車に引かれたとか、幼稚園の子供が、自分の乗ってきた送迎用のバスで、ひかれ即死したとか、目をふさぎ、耳をおおいたくなるような、悲惨な、地獄絵さながらの出来事が、ひんばんに行なわれています。

単に不注意とかといったことばでかたづけられないものを感ずるのであります。

機械をかんがえ生みだした人間が、いま機械によって自殺行為を行なっている皮肉な現実を、どのように受けとつたら

よいでありませんか。

それは、人間の知恵により創造された機械自体に欠陥があるのではありません。

むしろ機械を使用する人間自体に問題があるとおもわれます。

それは、高度の技術の発達に相応して、人間の精神、すなわちこころが高められないところに問題があるといえます。

西洋の文明は、科学、機械を基調にしているため、ものとを合理的に分析し、分化するのであります。

現代も、機械と組織の回転のなかに、社会はうごいているといえるのであります。

そこに生きる人間も、自分の意志というより、機械、組織によってうごかされているのであり、それが現代人ではありますまいか。

大部分の人が、人間性を失ないつつある、人間喪失ともいわれるゆえんであります。

それに比して、東洋のかんがえかたは、バラバラのものを総合——調和——していくところにその特色が見出されるのであります。

現代のように世界がせまくなったとき、東洋、西洋の二つ

の世界が一つになるには、西洋の合理的な分析的なかんがえかたにたいし、東洋の総合的に、調和するはたらきが協調するとき、そこに実現されるのではないでしようか。

三

仏教に因縁ということばがあります。

このことばのもつ意味をよくよくかんがえてみると、仏教における特色は、因より縁にその力をみるようにおもわれま

す。一つのものが存在するというのは、一つの決定的な原因によるのではなく、むしろ数しれない条件のはたらきが、総合されるところに、その存在性がみとめられるのであります。

めぐまれない、知恵のいたらないものが、一人前以上のはたらきができるのは、縁の力の結集によるのではないでしようか。「観無量寿經」の、

仏心とは大慈悲これなり

無縁いっしんの慈を以て諸の衆生を摂したまう。

とありますが、縁のはたらきを総合結集し調和して強力なものにするのが、仏心であるとおもいます。

人間のよわきところをいつくしみ、人間のもつごうまを打ち破り、人間本来の在るべきところに気づかしむのが、仏心であります。

よく母のところが大悲にたとえられます。いままで外面的なかざりにとらわれていた女の人がいったん母の立場にたつと、それがわるい母親であっても、自分を犠牲にしても子供をまもろうとするものです。

そこには、利害、打算をこえて、人間の本性的な愛のはたらきによるのでありましよう。

人間として知恵がすすみ愛らしい子供に、より可愛いさをおぼえるのはとうぜんのことではありますが、めぐまれない発育不全の子供であれば、なおさら、母親の情愛がふかくなるようであります。

それは単なる愛だけでなく大悲のころだからでありましよう。うれしい、いとしいという愛ではなく、深い涙にむせびながらそれをのりこえたきびしさをもつ愛情だからであります。仏心にふれるとは、自分だけが生きるのだというごうまん、わがままがうち破られ、すべての人たちによって生かされているという自覚にたちかえることであります。

遠いむかしから、お盆のまつりが、年々歳々うけつがれておこなわれてきたのは、いがみあう、せまい人と人のところをゆたかにかよいあわせ、社会と人とのありかたを、あたたかい人情自然のあらわれのなかにくみしってきたにほかならないとおもいます。



川 内 知 光

今日に於ける婦人の心の持ち方



私に与えられました演題は「今日に於ける婦人の心の持ち方」というむづかしい標題であります。

本来からは「心」をとりあげて詳しくお話をしなければならぬのですが、時間の都合その他からもっと切実な、具体的な意味のことを申しあげて、心については又の機会がありましたれば、それに譲らせて頂きたいと思えます。

最近人づくりということをやかましく言われるようになりましたが、私は人づくりと言うことは自分を立派に作って行くと言うことだけでなく、自分と同時に周囲の人々をも立派にして行くことでなければなら

ないと思うのであります。

本月京都家政女子短大の竣工式に参列致しました時、清純な短大生が人身受け難く今之を受く、仏法聞き難く今之を聞くという文句をきれいな声で合唱いたしました時に、私は知らず知らずに涙がにじみ出るのを覚えました。

人身はなかなか受け難いものであります。それを今受けて現に斯うして生かされているのです。この機会を外していつの日か人間らしい生活をして行くことが出来るかと覚った時、全く有難く生き甲斐を感じるのであります。

婦人会が「婦人講座」を設けて各方面から講師を呼んでお話を聞かれるのも、この意味があつての事で、洵に尊いことだと思つております。

先ず最初に申し上げたいことは子供さんの教育の事でありますが、近頃の「教育ママ」とか言つておられますが、人づくりの点で大変結構な点もあると思ひますが、又相当行き過ぎがある様に聞いております。実は言い難い事ではありますが、一部では「女に子供を育てる資格があるのだからか」と毒舌をはく人がある事は事実であります。之はお母さん達が良く考えて頂きたいこと

であります。

勿論子供は母が教育しなければ誰が教育するのですか、父は毎日家を外にして働いて留守勝ちですから、家を守っているお母さんに面倒を見て頂くより仕方が無いのであります。最近の傾向に教育ママと称せられる一部の人の行きすぎから、斯う言つた毒舌が生れたのであると推察しているのであります。

大体学校も家庭も同じく教育機関であると思つていられるところに根本的な問題があると思ふのであります。

家庭の中に学校教育を持ちこんでも巧く行かないのです。ところが之が平気で行われている場合があります。

家庭とは元来子供を教育しようとする為に作られたものではないのです。両親とはいやおう無しに教育者にせられてしまつたのです。両親には教育学の素養も経験も無い教育者なのです。余りうぬほれないようにして頂きたいのです。よく教員生活をしていられる人の家庭から非行少年が出るこ

とがあります。その親は学校教育を家の中に持ちこんだ結果だと思ふのであります。

家庭とはもともと愛の巣であり、憩の場所であります。父にとつては外で働いて帰つて来て安息する憩の場所であり、そして世の中で学校以外のしつけをせられて行くのであります。

いくら学校で給食の時間に食事のお行儀を教えられても、家に帰れば、父がパンツ一つであぐらをかいてビールを飲んでゐることは子供の目にどう写るでしょうか。そして主人をとがめずに子供のお行儀ばかりやかましく言う母親がいたとすれば、子供は一体どう言う感じを持つてでしょうか。

一方学校は子供を教育するために作られたものであります。家は自然に出来上つたものであります。学校は人間の文化が進んで人間の教養を高め良き社会人を作る必要から人為的に作られたものであります。

ここで学校と家庭との差別のある点を二三あげてみますと、第一に学校に子供が入學して何れ卒業してその学校から離れて行

くところです。又転校も許されます。中には中途退學も出来るのであります。ところが家庭には入學試験も卒業式もありません。学校は頼して選ぶことが出来ますが、家庭は生れてから成人する迄、或は一生涯をその巣の中で送つて行かねばならない所であり、学校は自分の性格にあつたところを選ぶことも出来ますが、家は選ぶどころか、生れたまま釘づけにせられる場所であり、家庭はとりかえることが出来ないのです。

子供にとつて学校は同年令の者ばかり居るサバサバした、明るい天地です。ところが家庭は一度まずく行くとやりきれないところであり、氣をまぎらわす運動用具も、砂場も、団体遊戯も、図書館も無いのです。

家では無口な陰気な子供でありながら、学校では活発な明朗な子供がいます。此等は皆とは申しませんが家の中心である主婦——お母さんの責任である場合が多いのではないかと思われまふ。

それから学校と家庭では構成人員が違うのです。学校では同じ年令層の子供が一クラスをなして共に学び、共に遊んでいるのです。この中に唯一人の大人——先生が教育の事ばかりを考えていて下さる人が居られるのです。校長先生始め諸先生は少くとも学校に在動していられる限り始業から終業迄子供を見守って子供の心身の成長を見守って下さるのです。

学校から帰って「只今！」と言ってランドセルを置いた瞬間にもう子供は違った世界に入つたのです。それに教育ママから「すぐ勉強しなさい、ピアノのお稽古をしなさい」と先生が言つた事もない押しつけが子供の耳の中に入つて来ましたれば、子供は勉強や音楽が好きになれそうではありません。

ピアノを買つた母親がピアノの練習をやがましく言う。元来ピアノは音楽を通じて子供の情操を豊かにし音楽を愛好する素質を育てるものであるべきが、ピアノを買つた為に子供が音楽が嫌いになつた例を私は

聞いております。洵に心得うべきことだと思ひます。

話を元に戻しまして学校には同じ年令の者ばかりが一クラスをなしておりますが、家庭では双生児でない限り家族の中に同年令の人が一人も居ないのであります。皆自分より年が上か、年が下であります。仲間らしい仲間はいないので。この中で子供は年令の違った人達の中に溶けこもうとしてゐるのです。此点を充分考えて子供と同じ線にまで引下つたお母さんになつて子供を育てて頂きたいのです。近頃は賢いですからお母さんが叱つても「お母さん自身の行いはどうだ」と鋭い批判を持つてゐる子供であることをよく考えて頂きたいと思ひます。

学校の先生には転職とか退職があります。時には気のあわない先生であっても進級と同時に担任の先生が変わつてはつとすると子供があります。お母さんには転任がありませんから、場合によつても子供は生涯抑えつけられ、叱りつけられてばかりでは子供が

可哀そうだと思ひます。

家庭には父があり、母があり、更に場合によつては祖父父母があつたり、まだその上にお仏壇と言う存在があつて家の中心、上座に鎮座しまして先祖として校長どころでない崇敬がはらわれております。ここに御注意あつて子供さんの教育の中心として育成して下さいますれば、年令層を超えて一家団業のスイートホームが出来上るのがあります。

家庭には生活と言うものがあります。経済を中心とした暮らしがあります。学校には家庭のような生活がありません。学校に家庭を持ちこめないとは此点を言つたので、家庭には生活を中心とした、学校では出来ないしつけを身につけさせるところであると言ふことを忘れないようにして頂きたいと思ひます。

最近婦人の地位が向上した、女と靴下とは戦後強くなつたと言われますが、現代は全く婦人を離れて文化は考えられなくなりました。然し甚だ言い難いことですが、婦

人には好き嫌いの差の大きいところがあるように思われます。「あの人が行くのだったら私は行きません」と言っただけをよく耳に致します。甚だしいのになると自分の生んだ三四人の子供の中に好きな子供と嫌い（？）な子供とがあつて兄弟が同じことをしても嫌いな方のした時にはガミガミと言う母親があります。誰でも人間である以上気の合う人と気のあわぬ人とがあると思いますが、もっと包容性のある人物になって頂きたいと思うのであります。「隣りに蔵が建てばこちらは腹が立つ」と言う諺がありますが、人の喜びを喜べる人になって頂きたいと思うのであります。

先程生活と言うことを申しましたが、生活とは生き活きと書きます。生きる、生きていくと言う事は上に向って行くと言うことでもあります。仏教に諸行無常と言う言葉がありますが、総てのものは移り変わって行くと言うことです。移り変わるとは上に向っているか、下に墮ちているのです。じつとして無いです。極楽とは上

に向っている姿であります。私達は生きています。即ち坂本九ちゃんではありませんが上を向いて歩いて行くことです。上を向いているのが仏様であり菩薩であります。此の仏、菩薩をおがむことがすなわち上を向いていると言うことなのであります。

最後に人の忠言を聞くと言うことであります。自分の事を申しますと変ですが、私は一日百頁以上読書しないと寝ないと言う方針を何十年と続けております。此点では私は一日一日が上を向いていると確信しているのであります。又私は常に私の周囲には常に注意して下さる友達を数人用意してあるつもりであります。色々と注意を受けましても、私はいつも静かにその忠言を聞いて、反省すべきは反省し、行を正しくして行こうと努力しているつもりであります。忠言に腹を立てずにその人の好意をよくかみしめてみる雅量が必要であると思うのであります。それと同時に親切心をもつてその人に忠言をして上げるようにして頂きたいと思うのであります。私は婦人会とは

斯うした事が常に行われる団体であると思ふのであります。

私は或る日私の崇拜するお医者さんの所に行きましたが、先生が奥様に「オイ」と言つて呼んでいられるのを聞きましたので「先生は患者さん、その他に崇敬せられていられると思います。それと同時に先生の奥様も同じく崇敬していられるものと思つておりますが、その奥様に「オイ」と言われることはどうかと思います」

と恐る恐る申し上げましたら、「和尚さん良く言つて下さいました。今から改めまして家内の名前を呼ぶように致します」

と言われまして私はその先生を益々崇拜するようになりました。

和顔愛語をもつて忠言をし、忠言を聞く人になつてより修養せられた良き社会を築いて行きましょう。

(京都大宮婦人会主催婦人講座講話摘要)

(問)(訪)(士)(名)



大本山光明寺法主

大野法道大僧正



大黒柱を失って困った

「これは全く困ったことです。切角、光明寺の創期的事業に取りかかろうという矢先のことだけに、全く困ったことです。光明寺のためにも、浄土宗のためにも」

いかにも困ったという表情を、身体全体であらわしながら、法主はなげきになげかれる。というのは、丸地執事長が、咽喉のわけのわからぬ病気で倒れてしまったからである。

「よくやってくれました。荒れはてていたこの寺が、ともかく今日のように草一本ないよい寺になったのもこの人のお蔭だし、大事業に着手しようというのも、この人の企画ですんでね」

聞くところによると、開宗八百年記念事業の一つとして、一億円近い予算で、本堂、総門、書院等の大修理をしようという企画を、丸地執事長は発表したばかりであった。又、事実この人なら、充分それだけの仕事をやる能力があったという。その人が倒れたのであるから、法主のなげかれるのも、無理はない。

法主の部屋といっても、六畳のまことに質素な部屋である。質素というよりは、お気の毒なような部屋である。然し、法主はそんな事是一向頓着ないようである。服装も、調度も、極めて質素な中で、充分ご満足な様子である。いかにも、大野法主らしい風格が、すべてに漂っていると言う外はない。

死に損ないの人間ですわ

「先生は、いつもお元気で」

光明寺の奥まった書院の一室で、記者はこう挨拶した。本当に元氣そのものなので、ついそんな言葉がでた。法主を先生と呼んだのも、大正大学時代の法主の印象が、記者にはそのままでてきたからに外ならない。

「なあーに。唯長生きしているだけです。よ。それでも、私は大病をして死にかかったんです。昭和六年頃かな。死に損ないの人間ですわ」

そう言って、法主は大らかに笑われた。なんでも「濃胸」とか言って、肋膜炎の悪質なものにかかって、もう少し手術が手遅れになっていたら、死んでいたということである。

「町医者だったもんでね、肋膜に水がたま

つていたのを、知らなんだんだね。そうしたら、それがすっかり化濃してね。順天堂にかつぎ込まれるとすぐ手術したので、なんとか助かりましてね。それでも大学では、大野先生はもう駄目だということになつてたそうですよ」

「それにしては、随分お元気で」

「ええまあね。それ以来、病氣らしい病氣してないね。病氣を忘れたんですやろ」

田満そのものの顔をほころばせながら、こうして生きているのが不思議だといわんばかりに、語り続けられた。次から次へと、立て板に水を流すようなしやべり方は、八十三才のご老人とは思えぬ様で、記者の方が先に疲れるほどであった。

「もう先生より先の人は、椎尾先生位ではないですか」

「そうですか。そう言えばもう皆死にましたな。そうだ、藤本洋音さんなんかは、私より年上の筈ですな」

そういつて、法主は昔の人々をなつかしむ様に、天井を見られた。藤本洋音上人と言えば、光明会の大先達の一人である。山口県で

ご健在の筈である。

ウヨウヨいた小僧

先生は、伊勢の桑名の産で、実家は瀬戸物屋であつたという。

「祖母が仏教信者でね、私が身体が弱かつたもので、商売には適しないというので、吉水靈信さんに小僧として世話するように頼んだらしいんだね。そんなわけで、松坂の樹敬等に弟子入りしたんだね」

「おいくつの時ですか」

「十五才の時だね。なにも分らずに寺へ入つたわけですな。師匠の大野法音師は、無妻でね、小僧を育てるのが好きな人だったよ。ウヨウヨ小僧がいたね」

無妻といい、ウヨウヨというあたり、いかにも大野法主らしい言い方である。ウヨウヨといわれるから、どれ程いたのか聞いてみたら、

「五六人はいたね」

と、あっさりしたものである。

そこで修行をしているうち、名古屋の教校に行くようにいわれて、入学し、更に東京の高等学院（今の大正大学の前身）にすすまれ

た。

「教校は四年制だがね、僕は三年から、すぐ高等学院に入れてもらった」

「よくおできになったのでしょう」

「いやそうじゃないね。そういう制度だったんだね。それに助けられたんだな。そんなにできませんでしたよ」

こうした謙遜の言葉も、決して不自然でないところで、法主の風格がにじみでている。

あの時は困った

大正五年頃、望月信享先生の招請で大正大学の講師となり、それ以後三十数年を、教壇で過されることになった。

「寺の方はどうなさつたんですか」

「昭和三年頃かな、小石川の知願寺を持つてね。これは貧乏寺なので、どうしようもなかったね」

「そうしますと、そこから、光明寺法主にとられたわけで」

「まあそうだがね、そこに一つ大きな問題があつてね」

なんでも、師匠の法音師が、京都の清浄華院の法主になられることになった為、松坂の

樹敬寺の住職のおはちが、法主に廻ってくる
こととなった。

「なにせ、大学で研究を続けている自分と
しては、三重に帰る気はとてもしなくて
ね。そうかと言って師匠の恩にそむくこと
もできずにね。これには、全く困り苦しみ
ました。しかし、とうとう決心をして、松
坂に帰ることにしたんですがね。そこに助
けの神様があらわれたんですよ」
樹敬寺の大壇越の原田二郎氏が、その助け
の神となったのであった。

「法道を、松坂に帰すことならん」

と、法音師に切り込んだらしい。この人は、
樹敬寺の為には私財を投じ、あらゆる協力を
した人であつたらしい。その為、法音師は
この人のいう事だけは、絶対服従であつた。

「そんなわけでね、私は帰らんですみ、弟
弟子が、後を取ることにになりましたね。原
田さんには本当に感謝しています。勿論、
原田さんは、私に一言もそんな事は申しま
せんでしたし、私も原田さんに、それにつ
いて話したり、お礼を言ったこともありま
せん。しかし、本当に感謝している次第で

す」

向学心に燃えていた法主にあつては、原田
氏は、かけがえのない恩人であつたわけ
である。

夫婦で永生き

それ以来、先生は大正大学の教壇で専一に
研究と、後進養成にはげまれた。戒律の研究
では、その方面の第一人者と認められている
ことは、周知の事である。

「奥さまもお元気で」

「ええ元気でね。今日も東京に行っており
ます。八十だというのに、一人で平気で出
かけて行きますよ」

記者も、同道した長谷川君も、考えてみれ
ば先生の半分以上の年である。えらい人は長生
きするものだなあと考えていると、

「山下僧正などは百三歳でしたかな。それ
にくらべると、まだまだですわ」

全く驚いたことである。これから百才まで
も生きようとの意欲も、充分ありと記者はみ
た。

「それでも夫婦で、ともどもにここまで生
きているのは、幸福という外ないね」

そういつて、法主は目を細められた。

約束の写真と色紙をもらつて表に出たら、
神奈川教区の組長さん方に出合つた。

「今日は会議があつてね」

柴田宗会議員がそんな挨拶をされた。なん
でも、丸地執事長の病気のため、今後の在り
方について協議されたいらしい。瀬高代理執事
長も、これからは大へんだという面持ちであ
つた。

それにしても、豪壮ではないが、立派な伽
藍の整つたこの大本山を、なんとか盛り立て
て行こうとする法主のご努力、神奈川教区正
の人々の熱意。記者は、なんというこたない
心温まる思いをしつつ、この寺の発展を願
い、総門を後にした。

涼しい海風が、清掃された庭を静かに通り
ぬけて行つた。
(安居香山)

御歌をいただく

むまれてはまつおもひ出んふるさとに

さざりしものふかきまことを

(勅修御伝第三十)

「むまれて」は極楽に往生してということ、「ふるさと」はお浄土に対する言葉として現世のことを意味します。そこでお歌の意味はやがて極楽に往生することができたならば平常から極楽往生を契り合っていた友だちたちの深い誠を第一に思い出し、同じく極楽に迎えましょう。

という意味です。

法然上人が第一に思い出して下さるという友人は、生前から一諸に極楽往生を契り合っていた人々ですから、いずれ劣らぬ名僧知識に相違ないと思われるかも知れませんが、実は一般の人々、つまり極楽往生を願う凡夫たちのことであります。鎌倉の二位の禅尼に送った返事に

「おなじ心に極楽をねがい、念仏を申さん人をば、たとい卑賤の人なりとも、父母師匠に

もとらずおほしめすべし。今生の財宝のともしからんにも、ちからをくはへ給べし。またすこしも念仏に心をかけ候はんをば、よくよくすすめたまふべく候」

とあります。問題は同じ信仰のあるなしであつて身分とか財産とかに關係のないことを教えられ、更に父母師匠と思えとあります。

お念仏の信仰の特色の一つは、自分ばかりでなく多くの人々と一諸に手をとり合つて極楽に往きたいと願うことであります。六時礼讃はかなり長い偈文ですが、その一つ一つの偈に「願くは諸々の衆生と共に、極楽に往生せん」の句が繰り返してついています。

極楽には上品、中品、下品の区別があつて上品には凡夫のうちでも優れた人々のゆくところとなつています。しかし法然上人は、どんな凡夫でもお念仏を唱えれば上品に往生できるのであると説かれましたが、この上品を願うのも決して自分のためばかりでないと、三部経釈に申されています。

「上品をねがふ事は、わが身のためにはあらず。かのくに、むまれをはりて、かへりてとく衆生を化せんがためなり。これあにほとけ

の御意にかなはざらんや」

極楽に往生してから、再びこの世に還つて衆生を救わんと願うことを還相回向といいますが、このお詞も、同じ意味のことを申されたのであります。

また上人が御流罪になったとき、藤原兼実公の悲しみを送つて慰められ、次のように申されました。

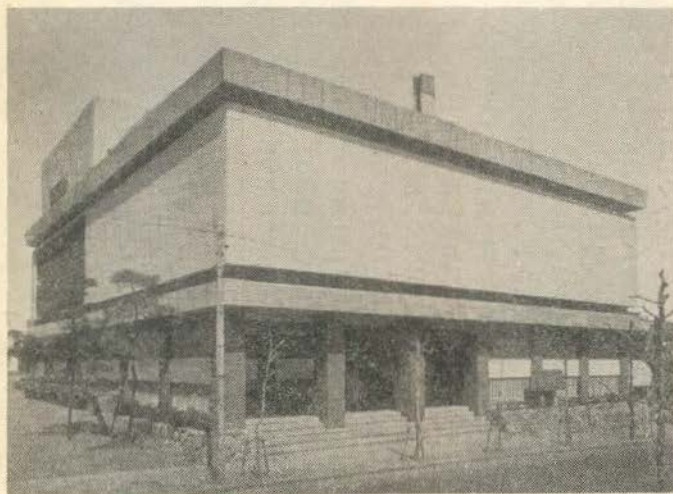
「浄土の再会甚だ近きにあり。今の別れは暫しの悲しみ、春の夜の夢のごとし。信謗ともに縁として、先に生れて後を導かん。引摂縁はこれ浄土の楽なり」

ここで「先に生れて後を導かん」とあるのも御歌の心とまったく同じであります。また極楽には十種の楽しみがあるとされ、見仏聞法、随心供仏、増進仏道、聖衆俱会その他が挙げられています。中でも引摂縁というのは極楽に往生し、神通自在の身となったならば世々生々に恩を受け縁を結んだ人々を心のままに化導して浄土にひきとることをいいます。こうしてみると願共諸衆生ということも、還來穢国ということも実は極楽のもつ根本的性格であることがわかります。(村瀬秀雄)

地味で、気さくな
実力派教団

妙智会

藤井正雄



妙智会館正面

教団は縁の下の力もち

昭和二十五年十月二十五日、霊友会を脱会して現在の地に新教団を設立したとき、宮本ミツ会長は、

「日蓮大聖人は『われ、日本の柱とならん……』とおっしゃったが、私は人間で、女だけれども、世のために、土台となって世界の柱となる覚悟です。」

妙智会の皆さんは、どこまでも縁の下の力もちとなる覚悟で精進して下さい。」(法話集「心に花を」より)

と開教宣言を高らかに朗読した。

罵声と暴行の果てに

妙智会の歴史は、大恩師(ミツの夫故宮本孝平)の唱えた忍善に支えられてきたといえる。ミツは明治三十三年四月十五日、千葉県山武郡鳴浜村(現在の九十九里町)に生れた。うぶ湯のかわりに水を使わせられた赤貧の百姓家の三女として育った。大正七年に隣村の宮本孝平の許に嫁し、東京に転じて仏立講に入信、築地本願寺前に開業した自動車屋はハイヤー五台を数え、大正十一年から十二年にかけてはじめて経済的に恵まれた生活を

もつようになった。

好事魔おとし。大正十二年九月一日の関東大震災から逆境に転ずる。前日、夫の痔の手術、翌日の大震災、四才の長女と身重の身体からの再出発は、次女、三女と生れた。大正十四年にミツが肋膜炎、腹膜炎、肝臓をおかされて入院してからは急降下する。一時重態となつたが病状は一進一退、無理に退院したのちミツの日課は寝ついたままの題目の明け暮れで六畳と四畳半二間の親子五人の長屋生活が続いた。

昭和九年、実兄石田平に導かれて靈友会四谷支部をたずね、六日目に創始者久保角太郎に会つて、結婚以来十八年にわたる仏立講の信仰をすて、靈友会に入つた。「先祖を供養することは昔からの伝統をもつ習慣だが、この現世にある自分は先祖とは切つても切れぬ縁につながる残身だから、先祖をも自分の身と同じように思え」(「妙智への道」九二頁)と教えられて、質屋通いをしての苦しい生活のなかに、久保を師として行者的修行が始まる。その間に病気のことも忘れてこの修行のうちに病氣は全快し、夫と子どもの靈友会の

信仰生活は深められていた。

しかし、昭和十九年五月に胃癌で久保角太郎が死に、翌二十年に長女に養子武保(現妙智夫会理事長)を迎えたのであつたがつづいて孝平を失つた。久保なきあと、力とたのむ夫を失い、激しい性格の小谷キミ会長のもとで些細なことで罵倒されても靈友会を去らなかつた。なぜならば久保から伝えられた教えはミツのすべてを支えている大きな力であり、夫孝平の忍善の教えに支えられていたからであつた。

小谷会長の偏執に近い暴言と暴力は「妙智の道」は次のように伝えている。

「口のきき方がなつていない」……「南無妙法蓮華經」と美しく染め抜いた旗をつける拂を手にした会長は、平伏した武保の肩にそれをふり下した。

「うむ」

武保の額に血管がふくれた。

「ばあも悪いんだ」

みつに向つてぎらぎらと光つた眼がむけられ、旗拂がとんだ。みつと武保母子は大勢の会員の前で無茶苦茶に罵倒されつづけ

た。……………

「どうぞお許し下さい」

と詫げる二人は罵声の嵐が静まるようにじつと地面に頭をすりつけた。その肩を小谷会長の下駄ばきの足が蹴あげた。目をむいた会長の口から青たんが飛んだ……………

「妙智への道」(一四四—一六頁)

昭和二十四年六月二十八日、身延山で叱責され、御旗―特に信仰の厚い、名譽ある支部に与えられる久保角太郎染筆の旗―をとりあげるといわれて、会長の命で松本支部長に殴打されたあげく、いわれるままに夜半に水を浴びるうちに失神、そのまま病床に臥した。

ミツの新教団設立の契機は、十一月に靈友会本部が脱税容疑で手入をうけ、金塊やコインが発見された第一回靈友会事件であつた。この事件以来、幹部に対する会長の態度は一層けわしさを加え事件の收拾をめぐつて、靈友会は混乱状態におちいり分烈した。

二十四年五月に博愛同志会教団、二十五年には宮本ミツも脱会して妙智会を設立するに至るのである。このとき、あい前後して、仏所護念会、法師会、德行会、妙法教、正義会教

団、妙道会、大慧会が脱会して新教団を設立している。

先祖の供養を通しての現世成仏

ミツが脱会を決意したのは、会長への不信とともに、霊友会そのものの疑問であった……同時に霊界のお指示という他力本願がいかにあやまった方向に導く教義であるかも、しみじみと覚るようになった。法華經の教えは六根を清浄にして、自己を宗成し成仏しようとすることを説く。因縁と苦難は自己の精進完成によって消除することができ、幸福に導かれるのである。自分の仏心を完成させ、自己完成の自力本願に帰ることこそが仏所護念の根本でもあった。霊友会は靈感術という法華經の精神と相反する矛盾をも含んでいた。幸い、みつは仏立講十八年の経験から、靈感術の悪い影響はうけなかった。霊界は仏心完成に精進すれば願わなくても指示は与えてくれる。みつは今こそ一人で本来の道を敢然と進むべきときだと決心した（『妙智への道』一七三頁）

妙智会の教えは、ミツの夫孝平がミツに教

少年部結成（本部本殿）



え励ました忍善を基本精神とし、霊友会から行者的要素をとりさつて法華經の行踐を根本とする。法話集「心に花を」からミツの言葉引用してみよう。

みなさんがお導きするときに、「商売ははんじようしますよ」とか、「病気がなおりますよ」などということは、いわないで

下さいよ。妙智会は、御先祖供養ですから、億々万劫からの先祖さまがご成仏あそばされますよう、しっかりご供養させていただくのを本義としているのです（昭和二十五年十二月十八日）。

先祖供養している方がたは、だんだんと家庭が明るくなって、しあわせになってまいります。これまでは地獄で七転八倒の責め苦にあった先祖が、手のひらをかえたように楽になってくるから、娑婆の子孫も楽になるわけでございます（昭和四十一年八月十四日）。

既成宗教は「信仰技術屋」「プロ」であり、先祖はプロの手によって成仏してはいない。そこで、先はプロの手によって成仏してはいない。そこで、先祖の供養することによって先祖を成仏させる。そして懺悔先を自己向上の道とし、仏・国土・一切衆生・父母に対する報恩感謝を生活の規範として家庭の円満、幸福と社会の教化を図る。それにより個人の安心立命、現世安穩がえられ、成仏から社会の繁栄さがもたられ、仏道衆土の建設が可能となると説くのである。

会長のきさくな魅力

私はよく「会長にあるまじき下司ゲスな言葉をつかう」と、いわれる。会員が多数集っている前で「小便に行きたい人は行きなさい」とか、面とむかって「お前さんのツラは」とかいうことが下司だというらしい。小便が下司で使つてはいけないというなら百科辞典にはのつていないと思うがどうだろう。小便は小便、ツラはツラである。それが下司でいやなら、会をやめて心にもな



全国信徒代表決起大会（日本武道館）

いお世辞をいい、「遊ばせ」で暮せばいい
 「妙智への道」二〇六頁。

右のことは端的にミツの気性を伝えてい
 る。機関誌「みようち」は毎号、信者による
 入信の動機と会長への感謝の言葉でみちてい
 ることをもつとも知ることができる。ときには
 は予言的言葉で、人の心理を見通す能力は靈
 友会当時の行者的修行が大いに役立っている
 ことは否定できない。会長のいらくさ、き
 さくさが妙智会を支えている魅力といつてさ

しつかないであろ
 う。

創価学会に對抗す

る宗教協力の推進

現在妙智会会員は公
 称七〇万、実質は確実
 なところ三五万で、山
 形、群馬、千葉、新潟
 に教会をもち、千葉に
 青年錬成道場が近い
 うちに完成、花巻、仙台
 市にそれぞれ教会を設
 立する予定で、その活

動は地味であるが、新宗運加盟の新興教団の
 なかで実力派といわれている。

「妙智会」一九二号（二月一日号）は、宮

本武保理事長が、昨年度の活動を回顧して、
 奉仕活動の成果、男子部の強化、地区活動の
 強化の三点をあげたのち、宗教協力について
 「ひとりよがりの偏見にとらわれ、他宗を邪
 教とのしる宗団もありますが、妙智会はそ
 れとは逆に、一切の宗教団体と手をたずさ
 え、宗教による世界平和への道を邁進しよう
 としております。教団としての社会活動も、
 この根本姿勢にもとづいて、より強力に展開
 して参ります」と述べている。

この理事の言葉を裏付けるように、東京都
 の都知事選挙に先立つ二月に、「時局対策宗
 教者会議」が結成され事務局が妙智会館内に
 もうけられた。この会議のねらいは公明党に
 對抗するための宗教者の協力推進で、結果的
 には松下正寿氏を応援して敗れたことはい
 うまでもない。しかし、任意加盟の宗教者会議
 であっても、前号に紹介したように、「宗教
 戦争」の激化のなかにその働きは注目されて
 いる。

お茶をおいしく —その7—

お茶を利用した楽しい料理法



茶器・田楽・茶のつくだ煮

黄檗幽茗流家元

三浦純亭

健康上パンを常食となさる方の多い今日でも、一日一回は米食にしたいとお思いでしょう。しかし、夏は御飯はくさり安く、お困り方の為に、くさり難い炊き方や、又、夏場に食事の進まぬ方々の為に、お食事の進む茶のつくだになどをしたためて見ましょう。

御飯のくさりぬ炊き方

米一升に対して番茶百六十匁の割合で茶を前以って煎じ出し、其の茶汁で御飯を炊けばよろしゅうございますが、なるべく固めに炊きます。茶の種類、分量は御家庭のお好みでよろしく。

しかし、おいしくいただくには、左記の材料をお揃えていただくましよう。

米一升、だし昆布二十センチ一枚

抹茶粉約小さじ二はい。お酒一勺、塩少々抹茶を臼で引く前の葉（葉物）大きじ一はい又は玉露大さじ

炊き方はつぎのようにします。

米一升に昆布だし一升の中に、抹茶粉をとかしたものと、塩とお酒を入れ、よく交ぜ合わせ炊き込みます。炊き上がったから少々むらし、お櫃に移し替えます時に、葉物をふりかけながらまぜます。玉露の場合でしたら、枝葉を取り除き、ほうちよう

の裏で細かくたたきましたものを用います。

茶がらのつくだ煮

材料

醤油 化学調味料少々 七味少々

作り方

微温湯で王露を味わたあと、更に熱湯で召し上がったのちの葉を、生醤油と化学調味料を入れて水分のなくなりますまで煮詰めます。煮上がりましたら七味を少々ふれば、まことにおいしいつくだ煮が出来ます。

御酒のおつまみにも適します。

二杯酢、三杯酢

王露のだしがらで、二杯酢、三杯酢も一度お試し下さいませ。この時酢につけますので、よほど熱湯を通したものでなければ、酢でしまりますのでこわくなります。

王露吸い物

コンソメスープの中に、細い品川巻のおせんべい三ヶ位に王露二、三本おとします。又は昆布出しのすまし汁の中に王露五、六本浮かすだけでもよろしゅうございます。手頃な王露吸

物が出来ます。

このお暑い時にお思いでしょうが、ついでに茶粥のお話をいたしましょう。

禪家では粥坐しやくざと申して朝はこの茶粥をいただきます。禪家ばかりではなしに、昔お粥を常食に用いましたのは、遠く神武天皇が御征討の当時、古武士の間で一日も欠くことの出来ぬ食事法として勵行されたのがはじまりときます。当時は茶粥でなく、ただの粥であったことは申すまでもありませんが、弓と弓との間に米が有ることも古武士の常食にふさわしく思われます。

茶粥十徳と申して「お粥の食法」「茶腹も一時」といわれますほどに滋養価値がございます。茶粥十徳とは

一、血色

二、増力

三、益寿

四、安楽……茶粥は清浄、柔軟で胃にもお腹にも無理はない

ので、身体安楽ということでしょう。

五、弁舌……茶粥は軽湿で茶の液は咽喉をうるおし弁舌が自然軽快になると申します。

六、徐風……身体が自然に調節され、悪風などにおそわれることがないということです。

七、宿食徐……胃腸を適当にあためたため消化を助け、前夜の食

べ物を残さずと。

八、飢消……軽食なのですぐにお腹がすくことを覚えます。

九、消渴……茶粥はやわらかなので、自然咽喉をうるおし飢をしのぐと共に渴きを防ぐ作用があります。

十、大小適用……新陳代謝よく。斯様に十徳が有介まことに手軽な米食法です。

食欲のない時に一度お試し下さいませ。

煮方は、上茶を少量新しい木綿の袋に入れて米と一緒に煮ますが、一合の米に対して二合の水にて、少し固めにサラリと煮上げます方が美味でございます。

亦、番茶の場合は、茶を袋に入れて別に煎じ出し、其の中にお米を入れて煮ます。吹き上げました時に少量の食塩を入れて味を付けます。お茶の葉の増減は好きずきです。

田 菜

材料

こんにやく 抹茶粉 白味噌 砂糖 化学調味料 塩少々

作り方

白味噌の中に抹茶粉、砂糖、化学調味料、塩少々入れて煮荷

め、あんを作ります。

こんにやくを串にさして、湯通して布巾でおさえてあんをつけます。

番茶のつめたい飲み物の作り方をお知らせいたしましょう。

先ず、番茶を倍じられ、それをヤカンで煮出し、別のヤカンに茶がらはずし入れ其のまま少しさまして、ガラス器のうつわでも、瓶にでも移う替え、冷蔵庫に入れるか、氷の上におのせになっておけば、真夏のさっぱりとして衛生的なつめたい飲み物でございます。

茶がらの効用

せっかくおいしいお話をしたあとで虫の話は如何かと思いますが、夏場はかつおぶしの貯蔵に茶がらを用いるとよろしく先ず茶がらを乾燥させ、その中に入れておけば虫がつく心配はございません。

夏の夜にお休みにくい時、茶がらを乾燥して、そばからの代わりにお入れになれば、頭の熱を取り安眠出来ます。

カットは茶粥、田菜、茶のつくた煮

貧と富

ところは、上野の某喫茶店。私は数人の友と憩いのひと時を過していた。人とは思議なもので、絶えず会っている人同志でも、その場に応じて何らかの話題をもとに話しを展開させる。

この日も帰宅の国電の中での話しがはずみ場所をあらためてということで、途中で電車を降りたのです。その話しというのは、「貧しい」ということはどういうことなのか、簡単に解決できそうなことで、仲々できそうにもない、「貧」ということについてでした。

この「貧」ということは人として大変重要なことであるにもかかわらず、仏教ではあまり具体的に説明をなしていないというのが友人の提言でした。

この「貧」ということについて、各人の意

見は仲々妥協点を見出すことができず、延々と話し合ってしまった。以下私なりの意見ですが、確かにこの「貧」ということは、人としてこの世に生れて以来、絶えずつきまとう、大変な問題であると思います。

この「貧」ということは、大別すると二つになると思います。それは物質的な貧と、精神的な貧でございます。昔より人間の苦悩の根本原因として、四苦八苦を教えております。この中求不得苦、つまり欲して求めてもなかなか物事が得ることのできない苦、この苦しみが、物質的な貧と相通じる考え方であると思います。現代生活においても貧富の差はひろがる一方で、仲々解決をみない問題でございます。この物質的な貧は、努力することによってある程度までは満たすことができ

るとは思いますが、人とはある段階まで達すると、更にその上を求めようとする気持がございます。これは三惑(貪・瞋・痴)の考え方と相通じることと思いますが、人には絶えずこの三惑がつきまとい、この気持から脱しえない弱い面が潜在しております。これに精神的な貧を加え、考えてみますと、それは各人の生活する態度につながる問題だと思えます。「生活」つまりこの世に生れいでた命を有意義に活動させるということ、この各人の生活態度の差が貧と表裏の関係にあると思えます。一日一日を充実した生活をなせば、自然にゆとりのある。のびのびとした心持ちで過せるであります。自分に満足のいく生活であれば、何ら悔いのないところだと思えます。

しかし、文章の上、頭の中ではこの様な解決めいた説明がなされるとは思いますが、一歩現実生活の中に考えますと、この様なあまり言葉では解決できない種々な「貧」がびこっております。この「貧」のまっわりついた生活をどの様に解決していくか、皆様の考え方をお聞きしたく思います。(一読者)

戦後強くなったのは、女性とナイロンの靴下だという。衛生的な面では批判もあるが、確かにナイロン製は丈夫で、ゴムの方が先にいたむ。女性も戦後いち早く参政権をえて社会の表面におどり出し、あらゆる分野にわたって活躍を続けるようになった。大変好ましいことであるが、世のグウカラ男性はヤキモチ半分に靴下と一緒にし、悪口をいうことによってウサをはらしているのかもしれない。しかし女性の強さは戦後のアメリカ思想によるものではない。昔から亭主を尻にしく女性

は沢山いる。高殿にのほつて民の煙の貪しいのを見て、三年間税金を免除された仁徳天皇は、古代日本の代表的な英雄であった。日本のピラミッドともいわれる天皇の御陵は、三重の堀をめぐらした前方後円墳で、わが国最大の古墳として大阪府に現存する。勢力の象徴といってもよい。仁徳天皇の皇后磐之媛は大変な嫉妬家。それで他の妃はもとより、使われていた女たちも宮中には入らなかつた。天皇は美人の八田皇女を妃とし、何回醜をかけ

《歴史夜話》4

ナイロン・ママ



玉山成元

でも磐之媛は承知しなかつた。そこで皇后が柏の葉をとりて紀伊の国へゆかれた留守に八田皇女を宮中に入れられた。帰りの船の中でこのことを聞いた皇后は、せつかくとてきた柏の葉をみな海に投げて御所には帰らず、簡城の宮に入って別居生活をされた。天皇は数回便を出したがだめ。最後は天皇自身が迎えにいったが皇后は帰ろうとしないので、すごすごと一人都に帰られた。この他、女鳥皇女、黒媛、玖賀媛など、天皇のロマンスは数々あるが、みな之磐媛の嫉妬を恐れ不成功に終った。さすがの英雄も皇の前後には頭があらなかつた。

平家を亡ぼし、鎌倉に幕府を開いて武家政治を起した源頼朝は、中世の代表的英雄ではあるが、大の恐妻家でもあった。頼朝にも龜前とか新田義重の娘とか大進局とかロマンスがあるが、いずれも妻政子の嫉妬のために、家をこわされたり、鎌倉を追われたりして思わぬ災難にあった。これに対して頼朝は政子の遣わした連中を詰問しても、政子自身には頭が上らなかつた。

磐之媛といい、北条政子といい、彼女らは武器をもって男をしのぐというものではなかったが、男まさりの腕力で活躍した女性も少なくない。巴御前の働きは周知のことであるが、板額もそれに劣るものではない。

建仁元年（一二〇一）五月、佐々木盛綱は幕府の命によって越後鳥坂に城資盛を攻めた。このとき資盛の嫡母の板額というものが女性の身でありながら腹巻を着て矢倉の上に登り、百発百中、よく戦うので近づくことができない。それで信濃の藤沢清親は後の山を廻って接近、板額を狙って射た矢が股を射通した。それで倒れるところを生捕った。翌六月になると清親はこの女性を伴って鎌倉に帰り、將軍頼家のところに参上した。ところが彼女は畠山重忠・小山朝政など列座の中を通っても少しもおびえる様子もなく、またへつらう様子もなく頼家の前に進んで坐った。それは大勇士のようであった。それをみて阿佐利と一義遠はこの女性を預りたいといった。頼家はこの女性は無双の朝敵である。それを所望するというのは何か考えがあつたのこと

かと問うた。そこで義遠がいうことに、別に考えがあるというのではないが、壮力の男子を生んで朝家を護り武家を扶けたいと。すると頼家は、この女は面貌はよろしいようだけれども心は猛々しい。それを思うと普通には愛せないだろう。お前（義遠）の考えは人間の考え方ではないといったが、結局許してやめた。それで義遠はこの女を伴って甲斐に下ったのであつた。

この話は本の一例であり、これをもって当時の女性が皆強かつたというのではない。けれども従来の女性観はあまりにも観念的に過ぎていきらいがある。武勇の士を子孫に得ようと願つた義遠の一件によつて、当時における武士の氣質がうかがえる。

むかしの母の多くは、きわめて素朴で視野は狭かつたにせよ、それぞれ自分なりに、人はいかに生くべきかの強い信念をもち、それにもとづいてわが子をしつけてきた。

それに対しナイロンママの状態はどうであらうか。育児ノイローゼとやら奇妙な現象が

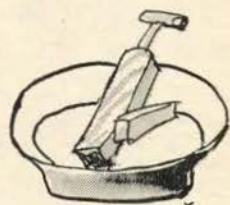
流行し、「よく乳を飲まない」という単純な動機から神経質になり、はては乳児をしめ殺したりもする。微に入り細をうかつ育児書のはんらんにも責任はあるが、結局は母親自身の自信喪失が原因といえよう。

現代流行語の一つ「教育ママ」もその例にもれない。彼女らは一見自信満々の体に見受けられる。だが裏をかえせばそうではない。信念も自信もまるでない。そのために人間の生き方を教えてやれないので、せめてそのかわりに学歴でも与えてやろうと血眼になっている。だから受験にでも失敗したらみじめなもの。子供以上にあわてふためく。その滑稽さは表現の方法をしらない。めざす学校にはいれなくとも、人としてりっぱに生きてゆく道があるなどとは考えても及ばない。

教育ママの尻にしかれる殿方はさておき、戦後女性のナイロン化はまだ本物ではない。外見や口先だけでなく、頭も心も相応したナイロンであることを望む。

浄土宗のおしえ <6>

三縁について



柴田哲彦

お釈迦さまのお説きになりましたおしえ、即ち仏教には沢山の經典がありそれぞれの經典をよりどころとした色々な宗旨があります。これはお釈迦さまが對機が法と申しまして、すぐれた能力のある人ない人、あるいは徳のある人徳のない人とおしえを説くにあたってそれぞれの人間にマッチした適切な説法をされたことによつて宗派と云うものが生れてきたのであります。でありますからすべてすぐれた教説であります、しかしそのおしえが大変むづかしかったり、実行することができにくかったりしたのではなにもなりません。浄土宗の開祖法然上人が「われ浄土宗を立つる心は凡夫の報土に生るることを示めさんがためなり」八四十八巻伝と申されているごとく、浄土宗のおしえは凡夫と云う言葉であらわされた罪深い機根の劣つた我々のようなものでも、阿弥陀さまのお誓いになった本願の力によつて、それを誠の心をもつて信じ、すべてを仏さまにおまかせして、清らかな明るい真実の世界に生れさせ

ていただきたいと願ひ念仏を称えるならば、必ずその希望はかなえられ実現すると云うことを宗祖は確信し開宗をされたのであります。このようにして浄土宗徒たる我々の究極の目的は往生浄土であります、
「いけば念仏の功つもあり、しなば浄土へまいりなん」八四十八巻伝と申されておりますように、我々は自分のつとめをはたし終つて生涯をとじたあとはもちろん、生きているとき、つまり日常の生活を営んでいるときでも、念仏の功德によつて如来さまのみ光りに常にまもられているのであります。これを光明摂取と申しまして、「仏光あまねく照らすにただ念仏のもののみを摂する」八選択集とあるごとく、念仏を称える者のみに与えられる特權なのであります。それはなぜかと申しますと、親縁（しんねん）・近縁（こんねん）・増上縁（ぞうじょうえん）と云う三つの縁があつて、阿弥陀さまと念仏者とがその三縁によつてしっかりとむすばれているからこそ得られる關係であつて、我々浄土宗徒にとつ

てはハッキリと認識しなければならぬ大切なことからあることは云うまでもありません。

この三縁については宗祖上人が「弥陀の化身」と申され「ただひとえに善導による」とまで云われた、唐の善導大師の著作である『観経疏』に説かれており宗祖上人ご自身も『選択集』にそれをよりどころとして解説していらっしやいます。それにゆりますと、

「一に親縁をあかす。衆生行をおこして口つねに仏を称すれば、仏即ちこれを聞きたまう。身つねに仏を礼敬すれば、仏即ちこれを見たまう。心つねに仏を念すれば、仏即ちこれを知りたまう。衆生仏を憶念すれば、仏また衆生を説念したまう。彼此の三業あい捨離せず、ゆえに親縁と名づく」

と説明されております。つまり我この身体と口と心とを、身口意の三業と申します。が、この三業をもって、阿弥陀如来さまの名を称え、礼拝し、一心に念すれば、い

かなるときでも如来さまは我々の声をきき、すがたをみて我々を護念してくださることなのであります。

この阿弥陀さまと我々との関係は親子の愛情を例にあげて考えてみるとよく理解できることでしよう。

十年ほど前のことですが東京の世田谷区で実際にあったお話です。ある母親が幼い子供をつれて買物にでかけたのですが、母親のチョットしたすきに子供が路上へとびだしてしまつたのです。そこへ運わるく路面電車が走ってきました。これを見た母親は身の危険もかえりみず、持物を投げすてて電車に突進してゆきました。するどいブレーキの音、その中で母親は懸命に子供を線路から引っぱり出そうとしていました。アブナイ！と思つた瞬間子供の右足と

母親の左手首が切断されてしまつたのです。しかし子供の命は救われました。救急車がかけつけてきた時、母親はシッカリと子供をだきしめて、自分の手首が切断されたのも気づかず、うわごとのように子供の

名を呼びつづけていたと云うことであります。このように母親は自分の命を捨てまでも子供をまもろうとし、日常生活においても、すがたが見えないと云つて心配し、顔色が悪いと云つては心配し、日夜子供の幸せを願つてくださる本当にありがたいお方なのであります。だからこそ子供が母親を強く慕い、母は子供にかぎりなき愛情をふりそそぎ、おのずから母と子はしっかりと心が結ばれているのであります。阿弥陀さまと我々との関係も母親と子供のあいだがらと同じく、み仏は我々の母親のようにかぎりない慈悲の光で常に護念してくだるので親縁と云うのであります。

次に近縁について見てゆきたいと思ひます。

「二に近縁をあかす。衆生仏を見たてまつらんと願すれば、仏即ち念に應じて、目前に現在したまう。ゆえに近縁と名づく」

とあるごとく、心をこめて阿弥陀さまを見奉りたいと願つて南無阿弥陀仏と称えるな

らば『観無量寿經』に「阿弥陀仏ここを去ること遠からず」と云う文が見られるように、決して我々からはなれた遠いところにおいでになるのではなく念仏する者のすぐそばに來現してくださるのであります。三祖良忠上人は「十万億刹の徑路遠しといえども彼此同心を親縁と云い、千返影向して拱護憐むことなく行者を離れざる一処來現を近縁と云う」(定善義記第三Vと述べられて、親縁は阿弥陀さまと我々とは心で同一となり、近縁は阿弥陀さまが我々に影のようにはなれつ護ってくださって常に一処にいることができる、場所的に離れることがないので大変近いと云う意味で近縁と云うと説明なされたのであります。

最後に増上縁であります、やはり『観經疏』によって見ますと

「三に増上縁をあかす。衆生称念すれば、即ち多劫の罪をのぞく、いのち終らんと欲する時、仏聖衆とともに自ら來りて迎接したまう。諸邪業繫、よく礙うる

ものなし。ゆえに増上縁と名づく」

とあり、一心に念仏を申す者はまさに臨終となったとき、阿弥陀如来さまの來迎を受け、生きていた間、毎日のようにつくつていた諸の罪障を阿弥陀さまのみ光によって、すっかりとあらひ清めていただき、淨土へ往生できるのであります。宗祖上人が「ゆきのうちに仏のみ名をとなうれば、つもれるつみぞやがてきえぬる」(四十八巻伝Vとうたわれたのも増上縁の意を示されたものでありましよう。淨土宗の大本山増上寺は云うまでもなく、この増上縁からとったものであり、山号の三縁山もこの親縁、近縁、増上縁の三縁に由來しているのであります。

月影のいたらぬ里はなけれども、ながむる人の心にぞすむ

これは淨土宗歌となっている宗祖法然上人のお歌であります。阿弥陀如来さまのお救いのみ光りは月影のようにかぎりなく我々衆生の上にそそがれております。私達は心

から阿弥陀さまを信じ念仏を称え、三縁によって如来さまのみ光りを常に受けて、眞実の生活にはげむことのできるよう心がけたいものであります。

施本 「おぼん」

B・6 変型

本文一〇ページ

価 一〇円

送料 実費

内容……お盆をむかえて／目連さまのなげき／母をすくうには／おせがきの話など

発行所 大道社

東京・千代田区飯田橋一丁目

十一一六

繪	連
話	続

みんなの法然さま

— 勝尾寺から吉水へ —

高 橋 良 和

さしえ 小 林 健 造



四国の地からかえってもよろしい。

という天皇からお許しの通知がきたけれど、そうかといつて、法然上人は京都にかえることを許してもらえなかったのであつた。

そこで京都に近いところで、しかも念仏の申しやすい土地というので、大阪と京都の間にあって、やや兵庫県に近い箕面の地におちつくことになったのである。

この地に勝尾寺という名所があつた。この寺は奈良朝時代の和銅年間に建てられたものでなかなかの古刹である。

然し法然上人がここを仮りの住居としたときはかなり荒れていたので、この寺につたわる引声（いんぜい）念仏という法要を営んだときに、僧侶の袈裟や衣がいちじるしく破損

しているの

これはもつたないことである。折角の引声念仏もこれではみすばらしい。

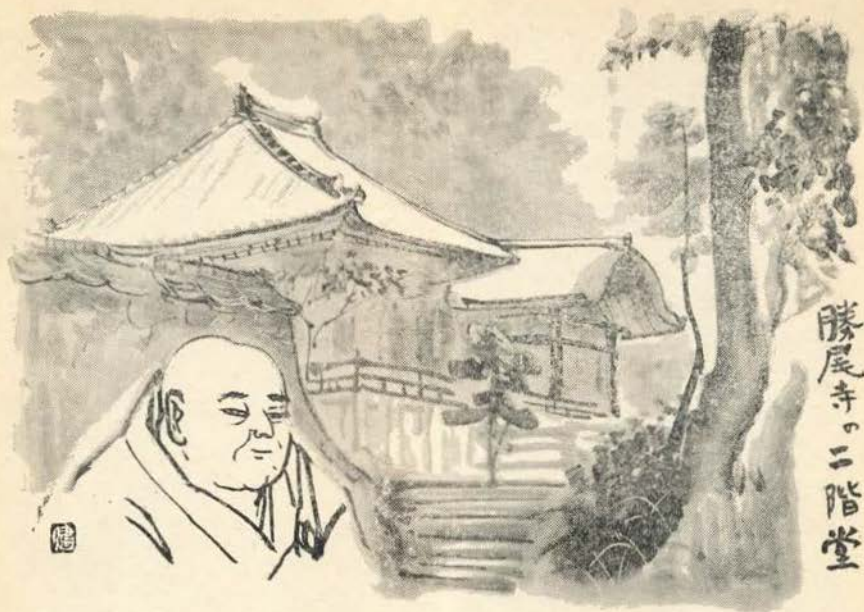
と法然上人はさる京都の信者に申付けて、その寄進を求めたようなこともあつた。

その外、この寺に八万四千の法門である一切経すらなかったの、法然上人は自ら所持の一切経をこの寺に寄進したのである。

そうかといって、勝尾寺での生活はやっぱり落ちつきがなかったらしくだんだん年をとった上人は、やはり住みなれた京都の地に思いをはせていたようである。

小鳥の声を窓辺に聞く勝尾寺のくらしも決して淋しいもの

勝尾寺の二階堂



ではなかったが、やはり花落の人たちの待つ京都ほどのことはなかったかもしれないのである。

それから四年は過ぎてしまった。

それはちょうど夏の七月の頃であった。

法然上人は遂に京都にかえることを許されたのである。生きて二度と見られない、という京都の地に法然上人は生きてかえってきたのであった。

それは十一月二十日のことであつた。上人は遂に昔なつかしい京都東山のもとの住居、吉水の独房にかえってきたのである。

お疲れでございましょう、上人さま。

上人さまのおかえりをお待ち申しておりました。

京都の人たちは、法然上人のかえってきたことを心からよろこんだのである。

もつたいないことじゃ、みながわしをこのように迎えてくれるのはひとえに、念仏というありがたい仏のみちびきがあつたからだ。なむあみだぶつ　なむあみだぶつ。

上人の口から流れてた念仏の声に和するように迎える人々の口からも、

なみあみだぶつ。

なみあみだぶつ。

という念仏の声が流れてたのである。

わたしのようなものをこんなにまでして迎えてくださって。

上人の感謝の心は更にいつそう人々の心をひきつけたようであつた。

その頃である。

この吉水の独房は、その隣りの天台宗のなかでもひとときわ格式の高い経五箇の門跡である青蓮院の寺域であつたのであるが、その門跡の住職である慈鎮和尚は、ある日のこと、この法然上人の庵をたずねたのである。

法然上人さまのようなお方が、こんな小さな庵のわび住居ではお気の毒でございます。どうかわたしの寺の土地や、建物をそのままお使いくださつて結構でございます。

と申しでたのであつた。

いいえ、慈鎮和尚どの、念仏を申すのには場所や建物は入りませぬ、どうぞ今のままで。

法然上人は謙虚な心もちで辞退したのであるが、上人に心をひかれる青蓮院の慈鎮和尚は、

どうぞ上人さま、御自由にお使いくださいませ。

と老令の上人のことを考へて、その土地と建物を上人にさしあげることになつたのである。

今東山の華頂山麓の知恩院に参詣してみるとよくわかることであるが、あの大きな地域は、栗田の青蓮院からそのまま寄進されたことがよくわかるのである。

もつたいことながら、それではわたくしといわず、念仏門に帰依する人々のために拝借することにした。

やつとのこと法然上人は慈鎮和尚の親切をうけて、この吉水の榊房を青蓮院からもらったのであるが、さすがにこの地は景勝の地であるから、京都の善男子善女人はまるで雲霞の如くこの地に集まつてきたのである。

当時はまだ知恩院とも華頂山ともいっていなかったのに、知恩院といわれるようになったのは後世のことであるが、この地には清水の榊房、松下の榊房、二つ岩の独房と三つの榊房があつたようである。そのなかでも法然上人は二つ岩の榊房に住居することが多かつたようであつて、そのあとが今の知恩院の御影堂といわれている。

京都の人にはもちろん遠近からもこの地におしえを求めにきたが、然し残念なことに京都にかへつてからの法然上人の健康はそうすぐれてはいなかつたようであつた。何分八十才の高令である。いくら元気な上人もやはりよる年波にはいたしかたなかつたものとみえて、建暦二年正月はじめから食事のほうもすまなかつたらしいのである。

編集後記

○梅雨の季節に入りました
が、今年は陽性の梅雨との
こと、各地で異常洪水によ
り農耕地を中心に、被害も
大分ある由、まだ当分はこ
のような天候が続くものと
思いますが、毎日を明かる
い気持ちで過したく思います。
○本年の日本印度学教学会
はさる六月十・十一日の両
日、東京大崎立正大学で開
催されました。本宗関係で
は、大正・仏教阿大学を中
心に遠く東北・九州方面か
らも宗学顕揚のために多数
の方が発表されました。
○先月も触れました、浄土
宗辞典編纂の主任にこの程
石上善応大正大学助教授が

内定いたしました。この大
学事業に皆こぞって協力を
たしましょう。

○開宗八百年忌をめざし宗
門あげて各方面に邁進して
おりますが、その中心とも
なるべき、新谷寛応総務局
長が病のため安静をしいら
れております。お見舞事し
上るべしと共に、一日も早く
快方に向われ又あの元氣あ
る活躍を待ちたいと思いま
す。

○会員の方の中で日常種々
お困りの事があることと思
います。御一報下さい、誌
上でその質問の概要と答え
を合せ載せ、皆様の参考に
したく思います。
○誌面充実を図るため、何
かよい企画がございました
ら御一報下さい。
○まことに申しにくいこと

ではございますが、会費が
切れております方は、払込
みをお願い申し上げます。

○鑽仰会の事務所へはいろ
いろの人が、最近出入して
くださいます。浄土雜誌を
菩提所の和尚さんからいた
だいたが、是非会員になり
たいので、といつて訪ねて
きて、ついでに、身辺にお
こつている問題について相
談をかけたたり、仏語の意味
を質問したりして、編集子
を喜ばせたり、あわてさせ
たりしています。
○一般読者の方で、色々の
面で援助して下さいますが
今度、時計店の方で、特に浄
土の会員の方に限り、時計
を二割引でお頒けして下さい
という奇特の方があらわ
れました。御希望の方は本
会事務所へお尋ね下さい。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 七月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十二年六月二十五日 印刷

昭和四十二年七月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式
会社

東京都千代田区板橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

郵便東京八二一八七番

うちなる叡智の横溢

無着像

鎌倉時代

奈良興福寺藏



アサンガ（無着むちゃく）といえば、大乘仏教を理論的に大成したひとりとしてあまねく知れ渡っている。けれども、学問的にすぐれていて、多くの著述を残したことがらを伝記から知ることにはできても、かれの人となりを身近かにいだで感ずることはなかなかできにくかった。ところが、この彫刻はありし日の無着そのひとと眼の前

で対話している感じを抱かせる美事さがある。多くの難問をかかえ、それを一生の問題として解決したいという意欲、理論だけではなく自己の生活と密着した世界に仏教の論理を展開しようとした実感、理論と実践をどう一致させたらよいかとつねに考えていた真剣なまなざしがここにある。天平時代の悲しみのある仏像に比較して、鎌倉時代の写実的ななかにもきびしさのあるこの彫刻には、うちに秘められている叡智が溢れでているかのよう、無着のきびしいばかりの眼、キリッとした鼻や口もとにうかがえる気がする。

インドの、しかもはるかに昔のひとの肖像を彫ろうとしても、彫るがわの力量と心の豊かさによって大きくも小さくもなろう。運慶一派の手になるこの彫像は確かに、ありし日の無着ではあるまいか。すみきった叡智をたたえるこの像の背後に、なみなみならない道体験の世界を知ることができよう。

（石上善応）

宝田正道著

新刊 日本仏教文化史攷 定価 1200円
90円

—目次—

- 序 宗教文化史研究のために
- 第一部 仏教文化における自然と人間（修験道発生の風土的背景・金峯山信仰の伝説とその思想的展開・鎌倉時代における浄土門声名盛行・中世布教文化の形態）
- 第二部 浄土教の人間像とその信仰形態（後鳥羽上皇の御信仰・千葉一族と浄土宗・本居宣長の人格と浄土宗・千呆禪師と『弥陀夢感記』・池永道雲をめぐる曇滹渚大家・青年期の露伴と仏教）
- 第三部 法然伝と和讃の書誌学的研究『師の知恩伝』攷・法然伝と謡曲との関係・『十楽和讃』と源信・『二十五菩薩和讃』の本文校異

東京都千代田区 弘文堂新社発行 振替・東京 53909
神田駿河台4の4 TEL・(251) 7186

◇ 浄土トラクト ◇

- 四季の寺まいり (再版) 安居香山著 価30・〒15
- 浄土宗のおしえ (四版) 宮林昭彦著 価30・〒15
- ご法語のしおり 葵ぐさ 村瀬秀雄著 価15・〒25
- 諸仏の戒め 村瀬秀雄著 価5・〒15
- 浄土宗のおつとめ<経本> 村瀬秀雄著 価90・〒35
- 一枚起請文をめぐって 村瀬秀雄著 価120・〒35
- 選択集私解 竹中信常著 価120・〒35
- ものいう石 竹中信常著 価150・〒45

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替 東京 82187